

## 「わたしが、かしこくお医者さんに診てもらおう力を育てる」アンケート調査

北海道十勝管内A町の小学校「高学年」の調査結果について（2016年2月実施）

### 北海道家庭医療学センター「診られる力を育てる」プロジェクト

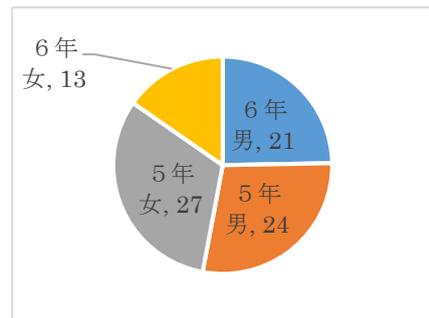
#### 1 アンケート調査の目的とその方法

2016年2月中旬、北海道十勝管内A町の小学校2校の5・6年生に調査協力をいただいた85名の分析結果を報告する。2校については、この調査目的をご理解いただきご協力をいただいたことに心より厚くお礼申し上げたい。

調査は、B校は6学級以下の学校規模で、5年生男2名、6年生男3名、計5名。C校は12学級以下の学校規模、5年生男22名・女27名、計49名、6年生男18名・女13名、計31名、計80名。

2校の学年別合計は、5年生男24名・女27名、計51名、6年生男21名・女13名、計34名、合わせて男45名・女40名、総計85名の協力を得た。

男女比は、男52.94%、女47.06%である。



#### 2 調査内容の分析

##### (1) 安心できるお医者さんのイメージ

問1では、病院や診療所へ行ったときに、安心できるお医者さんのイメージに近いものを11項目の中から3つ選択してもらった。（「図1 学年別安心できるお医者さんのイメージ」、グラフの割合の数値は四捨五入して表示）

「ア お話を聞いてくれる」は、全体では31.8%（85人中27人）で選択した中で5番目になる。ただこの比率は特に女子が高く、5年は29.6%あったが、6年は53.8%と半数以上が選択していて、全体の比率を高くしている。また学年でも6年全体では41.2%（34人中14名）の3番目に高い数値を示し、話をきちんと聞いてくれる医師を求めているのがわかる。

「イ 話し方がやさしい」は、全体では35.3%（85人中30人）で選択した中で4番目になる。ここでは特に男子が高い割合を示していて、5年男子41.7%、6年男子42.9%と4割以上が求めているのが特徴で、6年女子は15.4%とかなり低い。

「ウ 笑顔」は、全体が30.6%であるが、5年女子が44.4%と高く、男子を合わせて37.3%と笑顔と同率ではあるが、男女の割合が逆転しているのが特徴で、6年は女子が15.4%とイと同様に低く、6年全体でも20.6%となっている。

「エ 説明がわかりやすい」は、最も割合が高い数値を示し、全体で52.9%（85人中45人）であり、特に女子が60%と圧倒的に多い。男子でも1番の割合を示すが、46.7%と半数を超えていない。学年では、5年が54.9%にたいし、6年50%と若干5年の割合が高い。「医師の説明がわかりやすい」と「話を聞いてくれる」という2項目で女子の割合が高くなっている点に注目しておく必要がある。

「オ 清潔」については、全体で18.8%と低率であるが、6年女子だけは30.8%と突出して

いる。

「カ 診察がていねい」は、全体で 36.5%（85 人中 31 人）で 3 番目に高い割合である。5 年では 41.2%、6 年男子 42.9%とともに 2 番目に高い割合を示すが、6 年女子がたった一人が選択して 7.7%と全体の割合率を下げている。6 年女子は治療の方に重点を置いている結果が出ていることに着目したい。

そこで「キ 治療が上手」は、全体でも 41.2%（85 人中 35 人）で、5 年全体では 35.3%であるが、6 年は男子 47.6%と 1 番目に高く、女子は 53.8%と 2 番目ではあるが、学年として 1 番高い 50%を占めているのである。

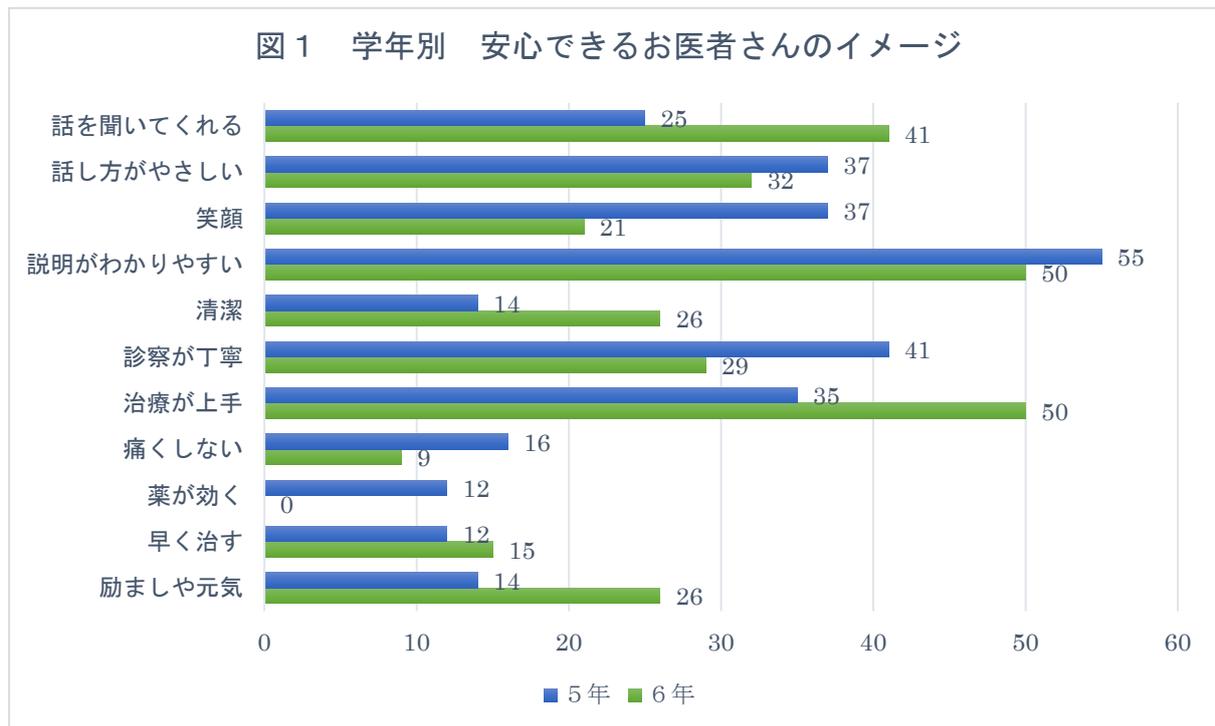
「ク 痛くしない」は、全体で 12.9%と低く、6 年は 3 人しかいなく、5 年の 8 人が割合率を押し上げている。

「ケ 薬が効いた」は、5 年のみが選択して 11.8%（6 人）であり、6 年はゼロであった。

「コ 早く治してくれた」は、全体で 12.9%であった。

「サ 励ましや元気をくれる」は、全体で 18.8%であり、5 年が 13.7%であるのに対し、6 年は 26.5%と倍の割合を示すが、特に女子の 30.8%が注目される。

整理すると、上位は 5 年 6 年とも「説明がわかりやすい」が半数を超えている。次に「治療が上手」41.2%、そして「診察がていねい」36.5%、「話し方がやさしい」35.3%、「お話を聞いてくれる」31.8%の順になっている。

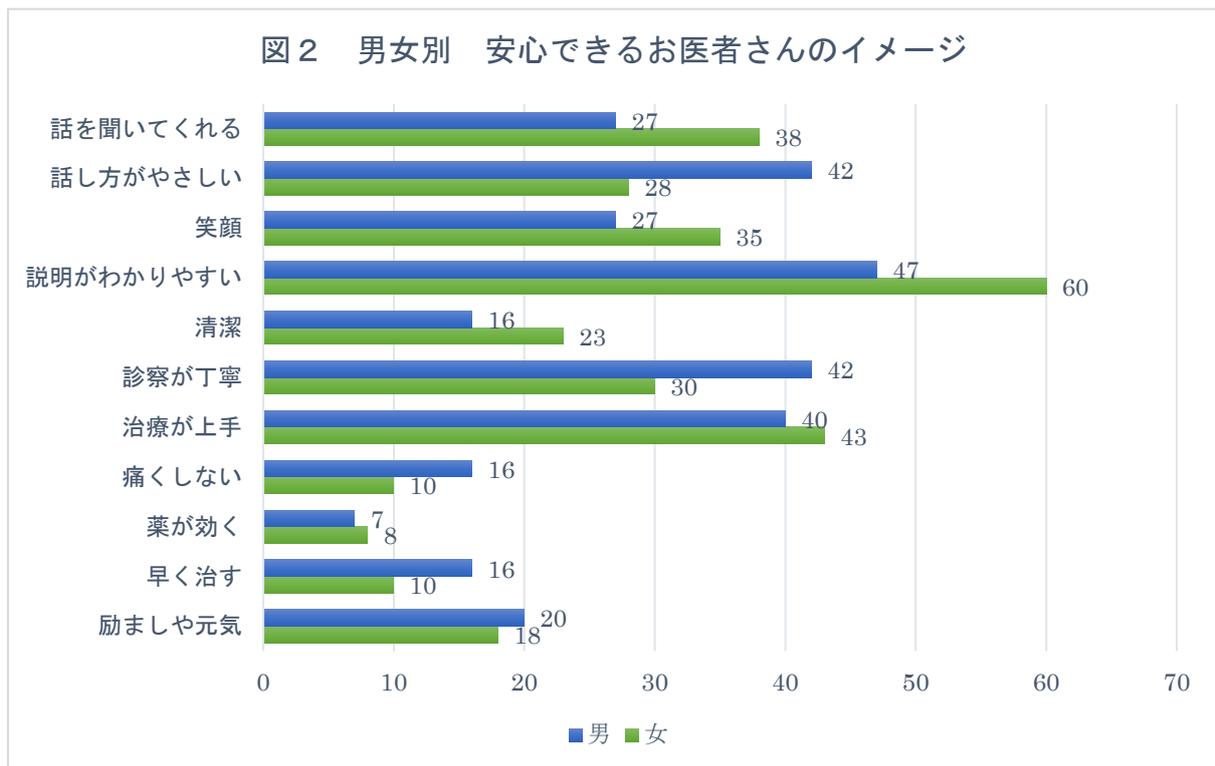


男女別では、共に「説明がわかりやすい」が一番割合が高いが、男子 46.7%、女子 60%と女子の方が 13 ポイントも高い結果から強く求めていることがわかる。男子が 2 番目に挙げたのは「診察がていねい」42.2%であるが、女子は 5 番目 30%であった。12 ポイントの差があった。女子の 2 番目は「治療が上手」42.2%で男子は 4 番目で 40%と差はあまりなかった。男子の 2 番目は「話し方がやさしい」42.2%であるが、女子は 27.5%と 14.7 ポイントと最も差のついた結果となった。逆に女子の 3 番目は「お話を聞いてくれる」で 37.5%であるのに

対し、男子は26.7%と10ポイントの差がついていた。また「笑顔」は女子が4番目に高い36%という割合を示している。

これらのことから、男女差では、男子が「説明が分かりやすく、話し方がやさしくて、丁寧に診察をしてくれるお医者さん」を求めているのに対して、女子は「説明が分かりやすく、上手に治療し、自分の話を聞いてくれる、笑顔なお医者さん」を求めていることが示されていた。

安心できるお医者さんのイメージから、男女の意識の差を理解し配慮した上で、子どもたちの診察にあたることは、基本中の基本であると考ええる。



(2) 事例「実際の安心できるお医者さんに治してもらっていたときのこと」

問2では、どんなけがや病気で治療を受け、そのときのお医者さんの様子や子どもが感じたことを、書き込んでもらった。

全体の72.9%にあたる62名（5年男17名・女18名、6年男16名・女11名）が書き込む。男子は73.3%、女子は72.5%と同率に近かったが、5年全体では68.6%だったが、6年全体が79.4%と5年よりも10ポイントも高かった。

書き込まれた64件の症状（複数記載2件あった）を分類してみると（「図3症状の分類」）、内科系が37件57.8%（男15件、女22件）外科系が5件7.8%（男3件、女2件）、整形外科13件20.3%（男9件、女4件）、皮膚科3件4.7%（男2件、女1件）、眼科1件1.6%（女1件）、耳鼻科2件3.1%（男1件、女1件）、歯科3件4.7%（男3件）であった。

内科的な症状としては、風邪（含インフルエンザ）20件、胃腸炎1件、発熱1件、肺炎2件、おたふく1件、熱中症1件、気管支喘息2件、ノロウイルス1件、带状疱疹1件、溶連菌2件、ネフローゼ1件、カンピロバクター1件、そして予防注射3件、計37件であった。

なぜ安心できる医師と判断したのかを見てみよう。インフルエンザで受診した子は「やさしく説明してくれた。安心して薬を飲んだり治療をしてくれた」（5年男）、「薬の効果を教えてくれた」（5年男）「先生に大丈夫だよ。毎日安静にして薬を飲んでいたら治るからと言ってく

れた」（5年女）、「やさしく子どもに合わせて接してくれた」（6年女）、多くの子は「笑顔でやさしく接してくれて、分かりやすく説明してくれ、丁寧に診察してくれた」と指摘する。

気管支喘息で治療された6年男は「すぐに治してくれた。時々顔を出してくれた」と入院当時の状況を評価する。肺炎をおこした5年女は「大おばあちゃんが肺炎で死んじゃったから不安だった時に、1週間ぐらいで治るから大丈夫と言われて安心できた」と死への不安を払拭したことを指摘する。高齢者の死因の一つとして「肺炎」は、子どもには辛い診断だったのである。だからこそ医師の大丈夫という励ましは大きな安心につながったかと考える。子どもの不安をいかに払拭できるかも、医師の説明いかんである。

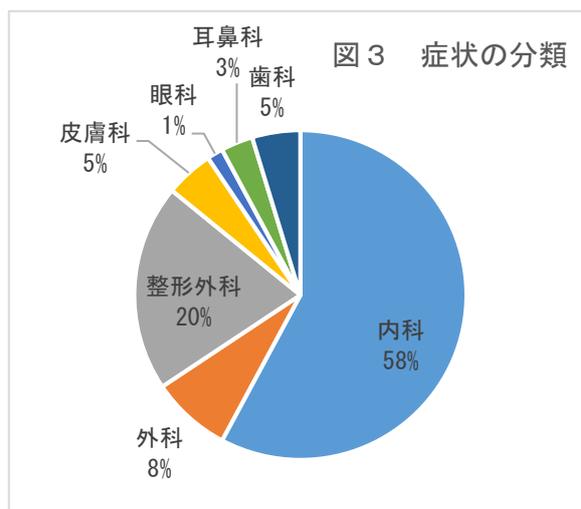
ノロウイルスに罹患した6年女は「座薬はいやだよねと、気持ちを察してくれた」、溶連菌で診察を受けた際「喉を見ると、私が金属のヘラをいやがっているのに気づいて、普通にしてくれた」（6年女）と、子どもの気持ちの察し方を評価している。また溶連菌で診察を受けた子は「小さい頃から診てくれた先生だから安心」（6年女）と、家庭医的な存在が信頼を培ってきたことを伺わせる。

カンピロバクターで診察を受けた子は「1日目わかりやすく説明、笑顔でやさしかったが、2日目別の医者で笑顔がなくやさしくない」（5年女）と二人の医師を比較する。またこの病名を覚えていることがすごいと思った。

今までのアンケート調査ではなかった「予防注射」に触れた3件は「注射するときに合図をしてくれた。注射は好きです」（6年女）「笑顔ですぐ終わった」（6年男）「全く痛くなかった」（6年男）と、中には好きな子もいることに驚いたが、注射嫌いには予防注射であっても不安を解消する手立てが必要なのだろう。

外科的な症状としては、「目の横を切って丁寧に治療された」（5年男）、「鍋で火傷をして、先生が励ましてくれた」（5年女）、「膝にガングリオンができ、やさしく私服だったので気楽に話せた」と医師の白衣が与える威圧感も感じていたようである。顎を切った子は「すぐにどうするか説明してくれた」（6年女）と処置について子どもと合意をはかったことがよかったのだろう。他に急な山から頭から落ちたという6年男がいた。

整形外科的な症状としては、骨折の子は「先生が笑顔で話しかけてくれたので話しやすかった」（5年男）、「説明が分かりやすく治療が上手」（5年女）、骨の欠けた子は「落ち着いて



これくらいならほっといて大丈夫と言ってくれた」(6年男)と安心する。少年団の活動をしているのだろうか、右肘の靭帯を痛めた子は「楽にやってくれた」(5年男)や野球肘の治療は「安心できた」(5年男)と指摘する。また、オスグット・シュラッター(成長痛)の子は「丁寧に診てくれた.説明が分かりやすかった」(6年男)や扁平足に悩む子は「僕に合った話をしてくれる」(6年男)と子どもへの気遣いを指摘する。親指が曲がらなくなった子は「すぐに診察してくれて、親指の様子を教えてくれてやさしく接してくれた」(5年女)ことで不安が解消されたのであろう。捻挫で治療を受けた子は「痛くしないようしっかりと固定してくれた」(5年女)と処置の技術を評価する。

肩を脱臼したのだろうか、「落ち着いていた.てきぱきしていた」(6年男)と処置の様子をよく観察している。腕が抜ける子は「まだ小さかったから、こうやってみてと、毎回腕が抜けたときにはやさしく言ってくれて、いつも安心して病院に行くことができた」(6年女)と回顧する。その状況を思い出せるのはそれだけ印象に強く残っているからであり、小さい頃出会った医師の印象はできるだけよくしたいものである。

皮膚科的な症状としては、手足口病の子も水疱瘡の子も「やさしかった」(5年男)と一言。蕁麻疹の子は「薬の塗り方などをやさしく教えてくれた」(5年女)と、親ではなく子ども自身が処置する仕方を教えることは、重要である。5年生であれば十分対処できるからである。ただし、自分で塗れない箇所の問題は残る。

耳鼻科は、副鼻腔炎の子が「自分の話を聞き、それに適した治療をしてくれた」(5年女)と子ども自身の訴えを取り上げて治療をしてもらったと評価する。同様に鼻炎で診察を受けた子も「自分のことを聞いてくれて、そのことに対する説明も丁寧にしてくれた」(6年男)と症状に対する訴えをきちんと受け止められたことを評価する。

眼科では、ものもらいで診てもらった子は「丁寧に話を聞いてくれて、いい薬を出してくれた」と医師の態度と投薬を評価する。

歯科では、3人とも「やさしく説明がわかりやすかった」と、特に虫歯でストレートに痛みを感じさせる治療方法は、椅子に座るだけでも不安である。その不安を取り除くのは、やさしい話し方と治療の仕方を子どもにも納得させることであろう。

ただここに指摘された医師への評価は、特別な配慮を要する事柄ではない。不安や恐れを持って医師と向き合う子どもに対して、安心感や信頼感をどのように生み出すのか。出会ったときの笑顔ややさしい語りかけ、そして症状に対する丁寧な説明、さらにその子がなすべきことなど、一連の診察・治療の流れの中で対処できる事柄ではないだろうか。心配しなくても大丈夫だよと、その一言でどれだけ不安が解消されるだろうか。

ここでも、出会った医師の表情や言葉、態度、さらには治療の知識や技術によって、子どもたちがその医師を信頼し治療に専念できるかどうかが決定的な要因であることが、この設問からも伺える。

### (3) 事例「もう行きたくないと思った病院や診療所に行ったこと」

問3では、もう行きたくないと思った病院や診療所に行ったことで、どんなけがや病気で治療を受け、そのときのお医者さんの様子や子どもが感じたことを、書き込んでもらった。

男18名(40%)、女19名(47.5%)、計37名(43.5%)の子どもたちが記入した。

5年男は、インフルエンザで治療時間が長くかかったことや転んで手の傷口に砂が入ったときに手当が雑で下手だったこと、足を痛めたときには態度が悪かったこと、風邪の診察が適当でとりあえず薬飲んでみたいな感じだったり、こっちを見ないで診察していてこっちから話ずらかったという。さらには骨折かどうかわからないとか、骨折でレントゲンを撮るときに適当に持ち上げられたことや膝痛の時にもっと痛くしたと訴える。

5年女は、ネフローゼの採血で7回も失敗された。きっと血管が細いか見つかりにくくて苦労して探したのだろうが、やられる方はたまらない。足が痛かったときに、パソコンをずっと見ていて「はいもういいで〜す」みたいに診察が適当だった。骨折では、痛いところをめっちゃ押されたという。歯科では無理矢理押さえつけられて治療されたと訴える。

6年男は、頭を打ったときの医師の説明が早口でわかりにくかったことと滑舌の悪さを指摘する。インフルエンザかもしれないけれど適当に調べて多分インフルエンザですねと甘かったと指摘するが、「適当に調べて」という文言から、医師の診察や診断の態度が腑に落ちなかったのだろう。捻挫をした子は面倒くさそうな医師の態度を見ているし、アトピーで診てもらった子はやる気のなさを感じていた。肉離れの診断で痛いところを押されれば、誰でもいやだが、どれも一言子どもの目を見て声をかければ改善することばかりである。ただ口臭だけは子どもも避けようがない。基本的なエチケットである。

6年女は、膀胱の機能不調で目を見て話してくれなかったという。学校ではお話しするときには相手の目を見て話しましょうとしつけられているわけで、コミュニケーションの基本が実現されていないことに、多くの子供は失望している。特に医療者には手厳しい。そこから信頼関係を築くのが、拒否感すら抱くであろう。マイコプラズマ肺炎のときに、注射針を何回も刺されながら、この先生は失敗していると思っているが、口には出せない辛さを感じる。注射については他に2人の子が指摘していた。「時間に追われたように急いだ感じで、早く診察を終わらせたいという感じが伝わってきた」という子は、どんな気持ちで診てもらっていたのだろうか。邪険にされているような嫌な気分だったろうか。

どの子も、医師の態度をしっかりと観察し、受け入れられない状況に対し、どうにもできない歯がゆさを感じている。一方的に受け身である立場では、医師との関係は常に縦の関係であり、はじめから子どもと距離を置くような診察をする医師には、これからも関わりたくないと強く認識するであろう。改善は医師の問題であるが、このように「診られる力」もまた育てられていくのである。ただ懸念されるのは、病院や医師嫌いになること。それだけは避けなければならない。

#### (4) 事例「どんな病院・診療所やお医者さんがいたらいいか」

問4では問1とも重複する部分でもあるが、子どもが考える理想の病院・診療所、そして医師をイメージしてもらった。81名(95.3%)の子どもが書き込んでいる。男43名95.6%、女38名95%と、大半の子どもが書き込んでくれた。医療への関心度や問題意識が高いともいえよう。

先に病院・診療所について、男10名、女6名、計16名の意見を紹介する。

5年男は、「早く終わる病院」、待たされるのは辛いからか。「十勝でいえば帯広とかの大きな病院」、「協会病院」と総合病院をあげる。「ゲームセンターのついている病院」「遊べる病

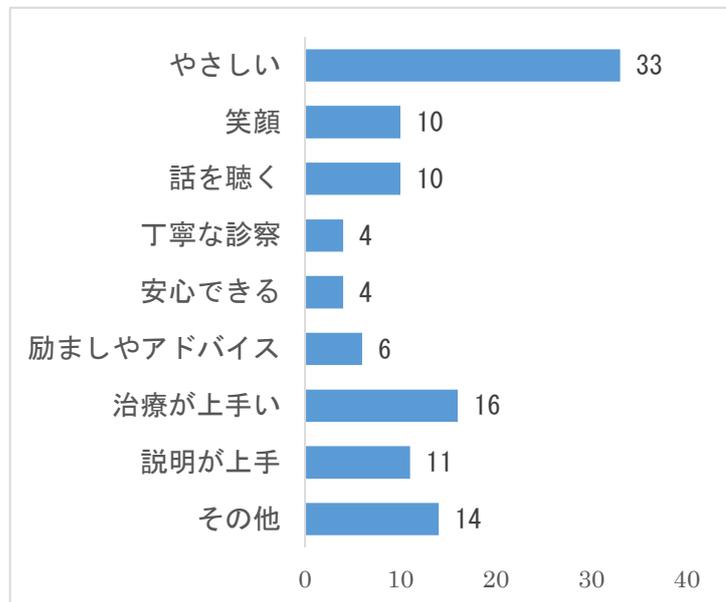
院」は入院中の退屈さを紛らわすためなのか。郡部であれば保護者の見舞いもそう頻繁には来られないかもしれない。

6年男は、「コンビニがあればいい」と2名が院内売店について求めているが、帯広市内の総合病院ではすでにコンビニが入っているところが少なくない。「清潔で掃除をしているところ」、「広くて明るい病院」、「この病院はすごくいいところみたいな…」とまるでホテルのようなイメージなのだろうか。確かに病は気からではないが、こんな病院の環境なら気持ちも少し前向きになれるかもしれない。

5年女は、「きれいで明るく広い、階段のないところ」とフラットの方が何かと動きやすい。清潔感を求めている子はさらに2人いて、6年女も2名あげている。また「第一病院、厚生病院」と帯広市内の総合病院をあげる。また「やさしくて男女同数の医師が欲しい」（6年女）は希望する。さらに、清潔感のある病院を求めているのは16名中5名であった。

医師についての書き込みは、男37名、女32名、計69名である。

キーワードでまとめると、全部で108件であった。「やさしい」が男女とも多く男19件、女14件、計33件（47.8%）と突出している。ここでは「やさしい態度や話し方」も含む。次に「治療が上手い・てきぱきと素早く動く・痛くしない」16件（23.2%）、「説明が上手」11件（15.9%）では、子どもにも分かりやすく話すということが肝心であり、「笑顔」・「子どもの話を聴く」10件（14.5%）は、迎え入れるやさしさや話しやすい態度が共に必要不可欠であることを示す。「励ましや適切なアドバイス」6件（8.7%）であるが、これらのことの積み重ねこそ、「安心」4件（5.8%）を担保していく要因であると考えられる。



ここでは男女の差が大きい項目は「笑顔」で女子が8名に対し男子2名であった程度で、他の項目は合計数が小さいだけに、論じることはあまり意味を持たないと考えられる。

子どもたちの声を拾ってみよう。

「早く上手に治療をしてくれて、どんなことに気をつけたらいいのかなどの説明をしっかりと教えてくれる人」（5年男）と言う子は見事に医療者たる仕事の本質を言い当てて見事である。「どんなけがでも病気でも詳しい人」（5年男）になるためにも、研修や臨床研究が継続的に必要となる。「説明が上手で子どもでもわかりやすく説明する人」（5年女）は、難しいことを求めている。「子どもでもわかりやすく」という説明は、特に学年の下の子ほど難しい。それでもなお丁寧に説明しようとする医師の言葉と態度は、子どもを真剣にさせる。具体的な説明内容について「病気の症状やどういう薬が効くなどの細かい説明」（5年女）をしてほしいのである。さらに、「自分のことをわかって欲しい」（5年女）と、医師とのコミ

コミュニケーションを切に望んでいるのである。「性別を気にしてくれる人」（6年女）と、性別による求める医師の態度の違いを明確に示していることにも注目したい。そして、「子どもから大人まで安心して診察することができるためにちゃんとした説明」（6年女）を求めているところは、医師が全世代に対して、安心して医療を提供できる職種であることを物語っているのであろうか。

子どもたちの気づきは、医療者の職業人としての責務や自覚を促しているようである。ただ診られて診断・治療される側ではなく、そこにしっかりと観察眼を持って身を任せているのである。信頼に足る医師であれば不安を安心に転化できるが、真逆の態度を取る医師には、ドキドキしながら不安を募らせていく。中には「注射が好きで、病院が好きで、行きたくないと思ったことがない。いろいろなお医者さんに診察してほしい」（6年女）と少し風変わりな子もいたが、せめて、どのような医師でも、最初にこの不安を払拭して欲しいと願うのは酷なことであろうか。

### 3 分析を終えて

この地区の医療体制は、道内の多くの郡部に共通することではあるが、万全とは言いがたい。内科・整形外科の診療科目のある診療所、内科・脳神経外科・呼吸器科・胃腸科・小児科・整形外科と診療科目が多くあるクリニック、ただし、常時診察科目の医師がいるとは限らない。そして歯科が2院である。もしものときには、1時間かけて帯広の大きな規模の総合病院や専門病院に駆け込むことになる。

地域医療の充実は喫緊の課題であり、医師不足が言われて久しい。そのような医療環境の中で、家庭医の存在もまた大きくなるであろう。もちろん子どもたちが無病息災に元気に成長していくことこそ願うべきことではあるが、避けられない怪我や病気は起こりえる。もしもの時にどのように医療機関とつながっていくといいのか、保護者には常に非常事態を想定して準備しておかなければならないであろう。医療機関が遠いから、子どもに我慢を強いることや子どもも我慢することをしては、早期治療のタイミングを逃すことになる。そこに都市部との大きな医療環境の違いが生じるのではないかと考える。

そのような医療環境の中で子どもたちは日々成長していることを、心にとめておきたい。

また、このアンケートから、この地域の子どもたちは、難しい病名をよく覚えていることに感心した。それだけ病気について強く関心を持っている証なのだろう。どのようにして治すのかを医師がしっかり子どもに説明していくことこそが、彼らの「診られる力と治癒力」を強化することになる。地域医療の課題を少しでも是正する方策が、ここに見えてきた。とても重要なことを、子どもたちが発信していることに気づかされたのである。

地域医療を進める大事な手がかりになるのが、「医師との会話」である。年齢を問わず「病や怪我と共に闘う」ために知識と心構えを、子どもたちは医師から受け取ってほしい。

このアンケート調査であげられた郡部でたくましく生きる子どもたちの声を、彼らの「希望」としてしっかり再認識し、診察や治療の場に臨んでほしいと願わずにはいられない。